



新局玉石童子訓

卷六



特
造 13
1279
21



1279

新局玉

石

警者成編前未聞
斯文婦幼代書傳

童子訓

曲亭老翁口授編

一陽齋後豐國畫

第二版自第三十

六回至第四十回

書肆文溪堂精刊

刊田

新局玉石童子訓下帙五冊自第三十六回至四十回總目錄

○卷之三下冊 第三十六回

善惡少年月下爭雌雄 復多財染六郎喪多財

○卷之四上冊 第三十七回

成勝通能遊歷赴東路 暗賢睡松下被蟒蛇吞

○卷之四下冊 第三十八回

秘罪過晴賢訪阿健 小忠二怒逐朱之介

○卷之五上冊 第三十九回

非情根抵妙美奇瘡 刑餘細人迭驚機

○卷之五下冊 第四十回

五足齋奉不盈詳往事 晚稻拂袖獨正閨



まはりのむらさき
 弱とつゝあはれを
 さつらつとせしめ
 死をほこす
 羊間人

夏賀志智
 政賢

信夫晚稻
 志のたけ

三三三子訓



近江判官
 高頼

將擇福艾
 危而後安

夏賀典膳
 政朝

三三三子訓



措名さしな

錦上添花にしんじょうせんか
有あ
雪中餽炭ゆきなかんたん
稀ひ

福富小忠ふくとみせうちゆう

こふとみせうちゆう

石上里子川



戰者必傷せんしやひつやう
勝者自強しょうしやじきゆう

福ふく
貌ぼう

吾足齋ごそくさい

延明えんめい

高嶋石見たかしまいし

好純こうじゆん

石上里子川

石上里子川



題簞笠先生隱居

関 弘道

蕭蕭脩竹遠第廬

雨笠烟簞一老漁

紫石潭頭閑下筆

釣來新著幾篇書

関賢才者二世與予同好友也童年嗣父祖箕裘而善書且嗜詩云劣孫興邦嚮得此詩即呈閱於予吟誦之間唱歎有餘蓋才之長短不由老弱譬彼我之年歲相距六十有一于茲老而顧已似有庭徑矣彼出藍之所稀自今而後上達可知時童子訓第二版刷人告成因而叨取以錄於簡端餘紙

弘化二年如月清明前一日

著作堂老永



新局玉石童子訓卷之三下冊

東都 曲亭主人人口授編次

第三十六回

善惡少年月下雌雄爭善悪少年月下雌雄を争ふ
財と復し朱六郎財と喪ふ財と復し朱六郎財と喪ふ

前回十三屋九四郎が店舗の段落葉乙藝が會話の言と聲と縁が重なる文と續て却説登時未朱之父野干主の夜紛れて久く外面の店の柱小身と倚て既小細聞を下ける落葉乙藝親子の再會其過去来の話説小胆と淡多且呆れ。肚裏小思ひを。誰か知る死那乙藝の俺も亦疎ら。那名心ろを知らる異母の女兄品も小夏への最奇人然で大和の阿懐も実の女兒心引れて主張始同下から俺今阿容々々と恥を以て裏面入るて哀ととも那金二百九十五兩と送る俺返さへ。僅小五兩十兩の傍財を

貫んとて。愁小面出ま。脂取らる。長談ま。うちひの鈍りて。その智恵る
 れ者似。又前六九四郎。金五兩と朱六小齋。と俺と。趕せり。と
 と。俺這里。未ゆ途。遭り。ければ。井も益。非如今。朱六。折より。かへり。東
 めるとも。三。寡の。知れる。五兩。金。往方。定ぬ。俺。逆旅。の。路。費。小。口。止。ぐ。も。あ。る。所
 詮。窘。れ。人。を。頼。と。其。懐。と。當。せ。よ。元。自。那。財。囊。と。檢。攪。ひ。て。走。六。四。五。れ
 東。ま。れ。世。と。渡。る。本。錢。あ。の。噫。嘻。介。と。人。の。恩。と。思。ひ。非。美。の。本。性。計。較
 既。不。定。り。と。情。地。小。四。下。と。見。か。へ。不。這。時。十。八。日。の。月。出。て。外。面。の。稍。明。る。小。こ。目。れ
 拾。簀。子。の。邊。朝。夕。暖。簾。と。上。下。ま。る。釣。竿。の。長。い。あ。の。是。究。竟。と。合。拍。て。
 閑。送。り。た。る。戸。の。間。より。裏。面。の。光。景。と。現。余。落。葉。乙。藝。の。位。ら。笑。ひ。つ。過。去。來。の
 物。語。外。と。見。久。る。暇。も。九。四。郎。も。亦。傲。然。と。眼。と。閉。り。と。又。れ。其。會。話。と
 うち。ひ。て。在。り。か。だ。朱。之。八。便。と。ゆ。り。と。う。ち。合。笑。り。釣。竿。と。徐。々。と。刺。伸。し。て

落葉が投捨する。那財囊の登櫃の頭小在り。と。周の方より引掛。情地
 奪合らま。介程。小。峯。張。朱。六。郎。通。能。御。高。朱。之。八。と。趕。ん。と。六。市。四。摠。と
 従へ。連り。路。と。走。る。是。日。下。晡。の。時。候。浪。速。の。申。明。亭。小。造。り。と。情。地。
 其。頭。の。人。小。向。小。既。小。朱。之。八。の。追。放。せ。れ。て。那。地。の。た。け。は。知。る。者。も。且。其。時
 刻。と。尋。る。小。兩。三。响。已。前。より。と。う。ち。小。力。及。び。只。得。其。首。より。思。ひ。捨。く。亦
 復。路。と。い。え。住。吉。の。里。か。り。東。身。程。小。六。市。四。摠。の。杜。伎。を。れ。も。囚。牢。疲。劣
 小。相。別。き。く。朱。六。と。身。單。わ。く。い。く。い。と。て。き。も。想。ひ。既。日。の。暮。れ。た。も。い
 小。月。の。出。さ。る。時。候。十。三。屋。の。店。前。近。く。か。り。東。身。小。夏。夜。な。れ。ば。戸。と。閉。果。ま。ま
 裏。面。の。老。女。客。わ。り。て。九。四。郎。乙。藝。と。額。と。合。し。て。う。ち。譚。小。聲。せ。り。と。六。市。四。摠
 左。右。ろ。く。入。ら。ま。又。只。那。客。の。ま。る。と。拾。簀。子。の。邊。小。人。わ。り。て。竊。聞。ふ。者。も。似

たり。甲夜闇るれ見えさる縁ど。老女客の伴當歎と思ふのう。他も亦蚊ふ蚊
 ると。厭どし。潜びて在る疑ふ。是は。隠見のあらざる。と。猜多敢て。蚊馬
 開ぐ儘。庇回し身と。潜して内外の容子と。現ふ程。身寄る長脚蚊と。掃む
 猶。規ふと。一响許料。と。知る。落葉し。藝の。親子の再會。長談の。奇く妙る
 る。幾條の。感嘆。と。あけ。程。夜。既。初更。過て。月。出。影。涼。く。相。端。近
 飛。螢。の。風。不。撲。れて。墜る。もの。の。茶。六。も。今。這。月。の。光。不。就。く。悄。々。頭。を。出。し。て
 件。の。隠。見。と。熟。々。視。時。他。の。單。面。せ。る。拭。の。風。不。吹。れて。落。か。疑。ふ。く。も。あ。ま
 する。昨日。も。今。陣。館。也。既。面。見。知。り。未。朱。之。外。け。心。悄。地。誅。之
 原來。他。の。要。ある。故。不。潜。び。て。多。る。ゆ。を。あ。ら。む。ぎ。ん。何。と。て。内。入。ら。し。め。り。け。思。ひ
 け。聲。と。被。猶。も。窺。る。程。朱。之。外。の。是。を。知。ら。ず。悄。地。の。鉤。竿。と。刺。伸。し。て
 件。の。財。囊。と。引。掛。て。竿。と。引。ま。る。框。の。邊。の。燈。火。の。光。届。く。暗。り。け。

落葉し。藝九四郎。さ。心。其。里。の。あ。ら。び。と。盗。見。あ。つ。と。毫。も。知。ら。ず。只。峯。張。末
 六。の。見。る。と。既。分。明。る。れ。且。驚。且。怒。不。堪。ど。性。起。る。と。推。鎮。め。思。ふ。う。噫
 無。慚。や。る。朱。之。外。奴。が。賊。心。る。後。罔。の。事。と。甘。む。も。明。々。地。の。哀。乞。の。落。葉。の
 刀。自。の。慈。善。る。俺。舎。兄。の。義。使。る。財。囊。の。金。子。の。左。右。な。れ。盤。纏。の。為。の
 幾。十。金。百。金。と。も。惜。む。と。取。せ。る。と。あ。る。開。と。恥。て。盗。と。恥。と。せ。愚。物。の
 本性。憎。む。推。捕。ら。捷。懲。を。目。今。金。子。と。復。さ。む。俺。か。の。來。る。甲。斐。の
 る。と。尋。思。と。あ。り。又。思。ひ。這。里。で。那。奴。と。捷。懲。し。て。二。包。一。財。囊。の。金。子。と
 と。復。さ。し。見。れ。れ。然。し。て。那。刀。自。の。慈。善。や。も。博。く。且。俺。兄。の。為。の。恥。を
 一。番。時。遣。過。し。這。頭。を。離。れ。て。見。ぬ。あ。の。と。深。念。と。多。く。猶。身。を。潜。め。て。在。り。け
 程。朱。之。外。の。財。囊。の。金。子。と。既。盗。合。り。か。が。ち。戴。は。く。懐。中。に。夾。め。て。時
 時。落。さ。る。拭。合。揚。ぐ。單。面。を。竊。歩。ま。る。浪。速。の。方。向。逃。去。と。未。六。を。吐。き

とどろの虫く庇間より立出て相距と十間許月と便小跟くも善少悪道
 異なるも走る同く夏の夜吹風涼を更初て人定近くるわけ然れば這時
 三屋の店内の落葉乙藝が今昔の語説稍果か九四郎の惘然たる頭を
 拾は膝を找め更落葉小向してひき離合時わの禍福齊く至るも抑
 乙藝が不幸なる奶々小相別ある今十の春秋を歴て憶りる再
 會の本意と遂へ俺二親の素懐小稱る己も深く歎びあり是併
 慈悲積善と宗とよの御身の老後と神佛の憐れせぬ感感應利益
 とそあら然ば御身年來苦勞して守育ひる姪女斧柄刀衾とあら
 孝順ふまで短命をける其代小年五より棄て生死も知るよりる一實の
 女見ゆるぬい斧柄刀衾及むも他も孝順の心きりる斯は俺九四郎
 今より御身の女塔へ大和津國同郷ならね一臂の力と盡さべ心づき思

の心杯か。と詞徐小慰むれば乙藝も亦俱小いさう瓢形の天鑛金の地小等生
 恩返まよりきた玉鉾の身の薄命といひる下の上と七まが歳長て今料ら
 ども環會まより一過世のける幸さう开も九歳の秋より養ひの恩浅くぬ
 這里る故の家主入御夫婦の慈悲微りせ今更の歎びあはべも是就ても痛
 まる家尊の大人木偶の東路小出て還らぬ人の數小入り山の恨れらと
 いひつよと泣沈め落葉も涙さうちかそ現れ其の親子兄弟さうも揃ひ
 仁義の家小養れぬ汝の果報過世のるさう皆九四藏主御夫婦の慈恩
 といふもあまの俺身さう及んや縁小觸ぬる身の幸小猶願さるる
 九四郎小向ひく喃女塔の刀衾斯は卒小似これと知らる如く大和さ
 杣木の家の續ぐ者さ朱之次と義絶さ斧柄が迷ふ孤る玉五郎ありと
 ども他の生れて五十日小至ぬ赤子るれ憑かると辟言水の上る泡小似ら

侵住とも開る左も右ものひるがら。明日又茶六四郎腋子小告と商量をて
後小是非と定めぬと答る折々杜四郎の咳はあつ奥より出て九四郎は
其藝と呼べる争う。夜の深きい小店の戸鎖と客人と納戸へ伴ひぬるや茶六
哥々が今までもかりあがる心許る。猶戸鎖さざりて族ぬやと問ふと
九四郎はあまき否茶六と遅くとも六市四摠と俱これ他が上後安ら
且這方へと傍小召れ。更小落葉小向ひて争う。嚮小も既ふのけり。あ少
年の俺故女兄の腹をける大江大人の蔭子也。杜四郎成勝是多。這回茶
六と共侶小朱之小乙藝等の疑獄と解けける一人をりて告れば落葉の席と
譲りて開らよ折小拜面あはれ。奴家へ乙藝の實の母大和の落葉でゆる
か。と名告と四郎はうち夢々唱も甲夜より奥の間也。御話語の條々送
もるく洩聞され感心の外ひるぎ俺も亦九四郎茶六の外任小いとも茶六と

弟兄の思ひとさへ做と者るまば小意せらるるもあらむ。や上嫂々更團と小
奶々いさそる冷やうるら納戸へ伴ひぬる。と云へ乙藝の點頭。然小奥へ臥
簞と儲けと母と休せらるてん喃奶々甲夜小不如意小焦燥ぬけけ投
捨られ那財囊其頭をそあらむらめ。今納めぬむと。とらむと落葉小
心つ死。寔小然小介るる平生の鏝一文でも棄べうへ思ひがりあふ主人夫
婦の方正さ小強難と性起りおけ。二百九十五兩ある財囊と漫小投捨
去の歳小似ける短慮やと痛痛く思れけ俺後方小あるへ死。と云へ
一看合りてよ。と云へ乙藝の仍燈の灯口と其方へ引向けて身と起りて右
と件の財囊と索る小あはるるもあらむ。杜四郎も指燭と正の四隅
履場箱招牌の蔭までも漏る隈る求獵れとも那地也けんあまき
落葉小後悔小はらふ九四郎眉とち頻單めて原采外面小盗見ありと



釜名氏

十

八葉台三上成

染六小逐れて
 朱之介夜
 財囊と擲る



朱之介

五

事こと紛まれて檢けん攪けんひけんん甲こう夜や虫むし殊と熱ねつろろければば漫まん風ふうをを食くひひてて店たのの戸こをを閉しめて一ひと團だん送くわしたら由よし断たんん大だい敵てき脱だつ落らくけりとと悔くわい恨こんめめ落らく葉はのの連れんのの嗟さ嘆たんしてて金きん銀ぎんのの上うるる御ご宝たから聊ちやうもも受う戴たいならずず困くわん死し物ものをを取とりと誰たれもも知しらずるる多おほくく薄うす情じやう婦ふ女にょ子しのの胸むね狭せまくく悲ひ泣なみみ心こころ狂くるままててやや苟くわう且じももらら三さん包ぱうのの金きん子しとと疎そ忽とつ小せう薄はく下げはは是こゝもも覺おぼええぬぬ俺おれ身みのの失あや誤まち左ひだりもも右みぎもも那あの金かねのの無む益やく小せう喪さうふふ時ときにに即すなはちち死しすすやや藝ぎ四し郎らう腋わき子こももううちち捨すてて措あはれれとと制とめめらられれててもも疑うたげげ解とけけねねばば藝ぎ杜と四し郎らうのの慰なぐさめめるる世よのの常じやう言ごん不ふ七しち云いふふ索さくねねてて後のち小せう人ひとをを疑うたげげとといいふふももああれればばとと決きめめるる燭そくとと續つづ更さらてて同どう処じょをを幾いく番ばんもも索さくるるかかいいををるるけけ話わ分ぶん兩りやう頭とう介け程ちやう小せう峯ほう張ちやう朱しゆ六ろく郎らう通つう能ねいのの末ま朱しゆ之し奴ぬがが後のちとと跟つてて約やく十じゆ町ちやう許こ既すでにに住す吉きちのの里りとと離はなれれてて右みぎ小せう川かわのの左ひだり小せう隄づつ防ぼうありあり逃にげれればば岐ぎ路ろありありとと言いははれればば究きゆう竟けいとと去さ向かうとと揃そろとと脚あしとと蝨しめめらら聲こゑ高たか身み小せう盜たう見けん名なとと喚わ禁きんれればば朱しゆ之し奴ぬのの驚おどろききをを後のち方かたとと見みええるる程ほど

ああののああららせせぎぎ朱しゆ六ろく蠅しやうくく跳と菟とりり項かう髮はつ捉とてて動うごせせ怒いかりり聲こゑとと震あららすす刑けい餘よのの臆おそ見けん朱しゆ之し奴ぬ陣じん館かんをを面おも善ぜんるる峯ほう張ちやう朱しゆ六ろくをを忘わすれれせせ剛かう才さい十二じふに屋やのの店た前まへでで你なんぢがが竊ねすてて走はりりぬぬ財さい囊のうのの金かね子しとと復くわええとと跟つてて來きぬぬとと知しらずるるやや夙しやく返かへせせとと懐なつへへとと刺さ入いれれてて抜ひきき出ですす財さい囊のうとと焚たきとと合あいい林りん平へい暗からら前まへ髪かみ猴こう子しのの金かね一ひと百ひやく九く十じゆ五ご兩りやう俺おれ大だい和わよりよりてて來きぬぬ俺おれ物ものをを你なんぢ小せう干かんるる夏なつややああるる盜たう見けん喚わりり外ぐわい聞もんすすとと放はなすすとと挑てん合がりり逃にげんんととままるる朱しゆ六ろくもも毫ごもも透すうささをを肩かた尖せん抓とりりてて抜ひきき出ですす件けんのの財さい囊のうとと捉とままるる放はなすす朱しゆ之し奴ぬ自みづか得とくのの白はく丁てい術じゆつをを盡じんしてて挑てん争しやうふふ一ひと生せい懸けん命めい財さい囊のうをを後のち方かたへへ投なげげ退たいままるる朱しゆ六ろくのの怒いかりり堪たままざざ身み小せう兩りやう刀たうとと帶たいるる甲こう斐はい小せう敷しき果くわままのの易やすけけとともも然しかししてて亦また落らく葉はのの刀たう自みづかのの歎なげめめややままららんんとと思おもひひ可か小せう敢かん其その本ほん事じとと盡じんささるる一ひと霎しやく時じ他たとと疲つか勞らうしてて拉ひんんとと思おもひひるる早はや受うけけるる挑てんむむ程ほど小せう天てんのの雲うんのの雨あめ催もよほひひ

三十二 川 卷三十一 十一

今更明る夏夜の月を隠し、朦朧と忽地暗くなりふける。浩処お
 一個の行客、年齢四十有餘、身中單衣を結折し、上小重、標麻の
 雨衣の身半、るをうち披で、腰小短、短刀を跨、是則武士あるべし。
 頭小戴く竹皮笠、脚絆草鞋の打扮、さ小精悍、故ありぬ。
 べき夜の行、小伴をも俱せ、只一人住吉の方より、歩と又、蝨めく來、おける
 程、今、朱六と朱之众、挑角ふと、遙小見、うち驚、近づ、來て、相距
 一丈許、勝負、什麼と、覘、程、小月、忽地、雲、隠、と、あ、四下、小、暗、く
 る、り、か、ど、又、只、件、の、初、客、の、慾、心、や、動、け、ん、竊、歩、を、找、と、出、く、今、朱
 之、众、が、投、り、け、財、囊、と、左、右、と、搔、撈、り、く、會、揚、試、小、重、け、は、憶、む、荒
 介、と、微、笑、り、多、争、紐、を、解、開、け、那、二、包、百、九、十、五、兩、の、金、子、を、の、懐、に、楚
 と、夾、め、て、又、搔、撈、小、恰、好、小、石、兩、箇、あり、是、究、竟、と、搔、合、り、て、悄、地、財、囊

へ入替、故の如く、小紐、さへ、結、ひ、く、あ、り、け、ん、處、へ、隠、れ、て、又、蝨、く、那、身、と、驟、を、ぞ。
 往方、知ら、ま、り、お、け、兩、虎、食、を、争、ふ、時、狐、其、虚、小、乘、と、古、語、の
 現、小、以、あ、る、哉、然、は、這、方、の、兩、敵、を、送、小、是、を、見、と、知、ら、ま、猶、も、争、ふ、并
 か、程、小、天、吏、月、の、雲、霽、り、影、復、鮮、明、け、け、は、朱、六、是、小、便、宜、を、以、て、既、小
 疲、勞、し、朱、之、众、と、耶、と、聲、を、り、投、り、か、を、朱、之、众、の、助、斗、り、つ、蟾、子、の、像
 小、平、張、り、亟、を、起、も、ゆ、り、を、を、朱、六、透、さ、を、登、り、菟、り、く、背、に、踏
 締、て、動、せ、ま、勇、る、聲、高、き、や、と、れ、朱、之、众、思、ひ、知、る、や、那、金、百、九、十、五、兩、の
 你、が、大、和、より、り、く、來、ぬ、と、い、ども、原、是、落、葉、の、刀、自、の、慈、善、を、く、沙、金
 と、唐、布、を、買、せ、ん、と、你、小、遞、與、る、出、処、あ、ら、今、朝、浪、速、を、障、り、お、さ
 落、葉、小、返、し、あ、り、よ、を、你、も、甲、夜、より、竊、聞、く、必、や、安、知、ら、ん、然、
 ぞ、と、も、那、折、小、你、刀、自、小、對、面、し、て、明、々、地、小、哀、を、る、素、より、刀、自、を、慈

善人の人なり時宜申して那金子と云ふ盤纏の爲にとり取らざるを
あはれ何とぞ竊とて走らざる其賊情を懲えんと云ふ俺這里まで跟
まら今那金子と云ふ復して落葉の刀自返さるる俺身の慾不做
ま事ならんや憎む勝る你が賊心有恠るべしと思はざれば俺兄九四
郎の義侠ある你の昔悪ある故れども單追放せられし珠の不便と思
ふの故に金五兩と赤圓して俺の課せし追せし時後れて及ねば日暮て徒
かの来りけり十三屋の門傍より你が甲夜闇に立紛れて裏面の容子を張
居らんと見出しれども訝し声をも被さ裏面の中に入りし況や件の金
五兩を遞與せし時宜ならねば支の茲及ぶのうら俺兄の好意と云ふ
做さんいさまぢやろ落葉の金子と云ふ復まの則是公道と云ふ俺兄の
徳へ取さる人情と公道と人情と両まらう綱へくも你這美と辨知して

今よりみづろ新おせよ落葉の刀自の義絶の堪えの故に謝断せらるる
大和へ返されし俺の義絶の弟の十三屋へ立入るべし後
まて忘るると思ひの隨に罵懲して却懐と搔撈て紙小包に金五兩と開
儘ふ合を出して卒と云ふ朱之介の頭へ托地と投付與へるる儘此下退
終る月と燭の四下と見る朱之介が投退ける財囊の故の儘にして後方九
尺の間在り朱六是と合して沙ち拂ひて懐に夾めていそ夜の路十三屋
投てかへる程の十八日の月影も真夜半時候のりけり不程の朱之介の頭
鶴の身と亀ゆる屢四下と見らるる朱六は故の路かへりおせよと云ふ
申すや身と起して朱六が投與へる金五兩と搔合りて包を開て數見て嘆
口氣して其金子と包を先積鼻禪へ結着ても東西足らぬ身の仕方定
め難く只諄々と嘆く申す折角物に金一包と朱六奴の合復されて其損料

川卷二
十五

中五両金是と落葉と乙藝もが新縁金の廉けれとも芥柄の産
 後ふ身故りて生まう赤子の恙る。と落葉が口説き。愁歡話。竊
 聞あるもわむ。金の子の鳩る比。情地。大和。赴。又物。小。は
 時耳もあらん。只是。星。然。好。も。少。七。轉。八。起。ね。田。力。子。小。あ。ろ
 去先京師。退。於。甘。樹。あらん。獨。言。胸。逞。虎。狼。の。本。性。臂
 と膝。塗。ま。る。壤。拂。ひ。拍。磨。り。身。起。り。悠。々。と。東。を。投。立
 去ける。迹。取。鳴。虫。の。聲。土。旺。中。央。立。秋。風。戦。々。隄。防。の。細。芒。も。招。き
 穴。久。の。一。進。退。出。没。不。測。の。久。後。も。猶。怕。る。べ。案。下。某。生。再。説。當。晚。十。三
 屋。の。店。内。乙。藝。杜。四。郎。の。財。囊。の。金。子。と。索。難。の。精。疲。勞。ら。く。竊。れ。け
 と。辱。す。不。思。ひ。絶。く。店。の。戸。を。鎖。ん。と。て。掛。る。折。ら。外。面。より。來。ぬ。者。あり。
 是。則。朱。六。之。近。く。隨。小。声。を。被。て。嫂。々。目。今。之。傍。り。ぬ。其。里。用。と。あ。ひ。ね。と。ぬ。ぬ

乙藝も杜四郎も噫。遅り待不承り。疾。這。方。へ。と。閉。け。る。戸。を。又。一。枚
 推。開。け。朱。六。の。衝。と。找。入。り。坐。し。七。九。四。郎。向。ひ。て。御。小。弟。六。市
 四。摠。と。共。侶。走。り。申。明。亭。造。り。朱。六。之。父。の。亭。午。の。時。候。追。放。され。り
 と。後。の。時。も。後。れ。往。方。も。知。れ。只。得。之。來。馬。程。六。市。四。摠。の。疲。勞。堪
 せ。世。話。許。止。宿。を。明。日。參。ら。あ。と。別。れ。是。より。と。俺。身。單。日。暮。く。這
 店。舗。頭。生。既。か。り。來。か。け。る。又。不。慮。の。あり。見。過。か。と。裏。面。向。い。入。り
 せ。其。後。の。直。示。と。告。る。を。九。四。郎。う。ち。破。り。開。き。何。の。知。れ。ぬ。も。這。里
 甲。夜。小。賊。難。あり。そ。る。今。急。告。る。も。益。る。這。客。人。和。郎。も。變。知。亦
 上。市。る。落。葉。の。刀。自。り。乙。藝。の。實。の。奶。も。り。今。宵。不。測。知。り。ぬ。と
 朱。六。共。く。落。葉。向。ひ。て。口。誼。を。舒。し。落。葉。も。と。ら。膝。を。找。め。初。對
 面。の。顔。び。と。盡。し。詞。の。露。の。面。乙。藝。の。店。舗。を。戸。鎖。果。々。杜。四。郎。と。共。侶。朱。六

玉不置三言卷三

西

玉不置三言

うらむ。甲夜小落葉を喪ひし。那財囊の金百九十五兩の事云云といひ出
 る。朱六も夢もあむ。其美の咄もよく知りし。今詳説示さ刀自由長兄もあ
 其故の箇様々々と甲夜小朱六之次。這店頭小潜ひ来て主客の語説と竊
 聞ち。財囊の金子と竊合する時朱六も七と湖窺居り推捉へ捷懲し金
 子と金復さす思ひかゝる然して又落葉の刀自の為不妙き出まじ朱六之次
 竊も速の浪速の方へ立去折十町許跟ひたる。如此々々の地方で。喚禁の所
 闘ふて思ひの随小投伏て件の財囊とより復ち九四郎が合せぬる金五兩を
 投與て之の束小け顔未と今見る如く説誇りの懐より其財囊と合せぬ
 落葉小返さぬ九四郎落葉と首也杜四郎も乙藝文膝の杖も覺
 ぬも俱小感嘆をける。當下落葉の差する色あり九四郎乙藝文向ひて
 這金子の失しる朱六之次が所為る然る惜むるも信らる一旦

他小取せしる。金子る者ど明々地小乞いで後闇に事とあこれ。眞四郎朝
 朱六主小より復されける。鈍ちゆよといひ財囊と合拾ま九四郎急推
 禁めて親中の中念の為内と聞て受合ぬと心屬れ然ると答ふ。財
 囊の紐と解開して合出ま二包の金子小あり小石人是ハ什麼と云り小
 呆れてぞと投出せ九四郎乙藝文杜四郎も俱小訝る并が中朱六も驚きぞ
 且耻且悔ての事。原来風も朱六之次奴が財囊小石と容易て俺を欺た
 るる人然といひ知ら疎忽の能備の解した中面目今。那里までも趕蒐て
 金子合復さす己んぞとといひ刀と合て身と起ま九四郎之を喚禁
 め。朱六も功多。和郎幾里趕ふとも逃る者ハ路と擇も他
 唐々と和郎を俟んや。敦圍くとも今ハ要る。端も仔細と告よかといひて
 朱六嗟嘆不堪姑且と答る。現小必也。今も身非飾る小似れとも。

株
守四郎、面類、甚不、出来、千万



あちち

〇〇〇

三石音子川巻三下

十六七

文美堂上



染六を制
めて九四郎
意見と示と

る六

九四郎

三石音子川巻三下

十六七

朱之众が那金子と竊合し首より俺胸窺て由断せむ并々儘迹と跟鬼と投
伏し這財囊とどり復あ終まて他いふあて這小石と容易る暇あり但桃
角へ折他財囊と投退し照る月猛可雲隠れて一雨葉時暗く做かされ
久きとあわらむ雌雄と争ふ折多ふ三回六臂をさるせ他何等の暇あり然る
科玉と要せんは是れ小由く是と思へ這小石は朱之众が竊合さる以前より財
囊の内小あけり飲其あると以時へい奇くまき怪し斯と知らん這店頭
朱之众と推捉へ財囊とどり復まろし小落葉の刀自の心と汲て地方と易
た係故少と照据人あるをりけれ俺分説も聞た小似たり悔きるをさくけり
かき陳むれば乙藝社四郎も慰難て左あり右とあんとらふの俱小疑解さるけり
段文猶多ければいふ説も盡まらば又巻と更て下回小解分ると聴孫か
新 局 玉 石 童 子 訓 卷 之 三 下 冊 終

村田

